

Title	慶應-南フロリダ大 : ジョイントセミナー参加報告(1月28-29日 南フロリダ大学)
Sub Title	Keio-South Florida joint seminar
Author	加藤, 真樹(Kato, Masaki) 八賀, 洋介(Hachiga, Yosuke) 四本, 裕子(Yotsumoto, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2011
Jtitle	Newsletter Vol.15, (2011. 3) ,p.6- 6
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0060">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000015-0060</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ジョイントセミナー参加報告

### Keio-South Florida Joint Seminar

(1月28-29日 南フロリダ大学)

2011年1月28日、29日にかけて、慶應—南フロリダ大ジョイントセミナーが南フロリダ大学で開催された。慶應 CARLSからは渡辺拠点リーダー、一方井、八賀、加藤、四本の5名が参加した。ホストである南フロリダ大学清水教授の挨拶ののち、心理学部長、医学部長より開会の挨拶と、南フロリダ大学の紹介が行われた。初日は慶應側の参加者が発表を行った。渡辺教授より慶應義塾大学の紹介が行われ、続けて渡辺教授の共感に関する研究発表が行われた。その後、セキセイの闘争後親和行動（一方井）、行動分析学における強化（八賀）、ジュウシマツの歌学習と遺伝子の関係（加藤）、ヒト視覚系の認知機構とその可塑性に関する研究成果（四本）について発表を行った。2日目は南フロリダ大学の心理学系、生物学系、医学系と多様な研究室の研究者たちが、アルツハイマーの進行と物理的脳障害との関連、家雀の個体間での表現系の違いを生み出す可塑性の探索、飲酒と社会性の関係、視覚認知、脳梗塞モデル動物の分子生物学的解析に関する研究発表を行った。多様な研究分野の発表にもかかわらず、それぞれが少しずつ関連しているように感じられ、研究室間、学問間の垣根が低く感じられた。慶應 CARLSも同じ形態であり、今後も南フロリダ大学との交流が続くことでお互いに刺激し合えるものと思われる。南フロリダ大学は規模も敷地もケタ違いであり、ラボツアーでいろいろな研究室を見学させていただいたが、学問的な刺激だけでなく良い運動にもなった。

(加藤真樹)

2011年1月28、29日の二日間にわたり、南フロリダ大学で慶應—南フロリダ大学合同セミナーが開催された。南フロリダ大学とは2008年より国際協定を結んでおり、合同セミナー開催は昨年度に続き第二回目である。本拠点からは拠点リーダーの渡辺のほか4名が参加した。セミナー出席者はおよそ25名程であった。

初日は南フロリダ大学心理学科長 Michael Brannik 博士及び、Center of Excellence for Aging and Brain Repair (CABR) 所長 Paul Sanberg 博士の挨拶から始まり、本拠点リーダー渡辺が開催の辞に替えて自らの研究を紹介した。続いて、南フロリダ大学の清水透博士が議長を務め、一方井、八賀、加藤、四本が順に各50分の時間で研究発表及び質疑応答を行った。昼食時にはレストランの長机を囲みセミナー出席者で懇談を行い、午後は南フロリダ大学の複数のラボの研究施設を見学させて頂いた。2日目は CABR の Cesario Borlongan 博士が議長を務め、南フロリダ大学の5名の若手研究者が発表を行

い、昼過ぎに解散となった。

本セミナーは若手研究者の交流、発表の機会を与えることを目的の1つとしており、南フロリダ大学の研究者の発表時には、ご厚意により日本人研究者が優先的に質問をする機会を与えて頂くなど、教育的配慮を感じるセミナーであった。また、両大学の発表者は様々な研究的出自を持っており、研究テーマ、目的意識、研究手法などの異なる多種多様な発表を拝聴する機会となった。自分と異なる専門領域と互恵的な学術研究を行うことは簡単ではないと感じる一方、それを実現させるための取り組みの一つが目の前に展開された。まだ萌芽的であるが、小さな芽を今後大切に育てることが必要かつ有益となるであろう。

(八賀洋介)

On January 28th and 29th, under a joint psychology and neuroscience research initiative, five researchers from CARLS, and researchers from the University of South Florida convened a two-day joint seminar to discuss their work in psychology and neuroscience. The CARLS researchers and five USF researchers presented their researches. Seminar topics included presentations on animal cognition, gene expression changes in the songbird brain, the scope of differential reinforcement, and neuroimaging study of visual processing. The seminar was followed by a social luncheon and a tour of several USF neuroscience / psychology laboratories. Researchers from both institutions enjoyed this exciting opportunity of expanding their academic and cultural perspectives.

(四本裕子)

